思い出の家

下長中学校　三年　白井　来羅

　私は、祖母の家がとても好きだ。なぜなら、たくさんの花や緑に囲まれているからだ。名前は全く知らない花が多いけれど、見ただけで心がいっぱいになるものがたくさんある。季節ごとに景色が変わる家は小さい頃から私の自慢だ。

　私が幼稚園のとき、花の世話を曾祖母がしていた。毎日欠かさず、庭に出て、水をくむ。それを何回かくり返して全ての花に水を届ける。小さいときはその水やりを何回か手伝ったことがある。花にはかけないよう、丁寧に行う。鉢の底から少し水が出てくるまで水をかける。たまに、水をやりすぎて注意されたこともあったけれど、曾祖母と一緒にする花の水やりは本当に楽しかった。

　小学校にあがると、曾祖母に会う回数は減ってしまった。水やりをするよりも、友達と遊びたかったからだ。そんな日が続いて五年もすると、曾祖母の家に行くことがほぼなくなってしまった。

　それから、もうしばらくたった頃、曾祖母が亡くなった。以前会ったときは、とても元気だったのに……。もっと家に遊びに行っておけばよかった。もっといっぱい一緒に話しておけばよかった。私はとても後悔した。

　亡くなった後、荷物の整理は母がした。曾祖母がいつも寝ていたベッドや、クローゼット、衣類等はなくなった。しかし、小さい頃に私が描いた曾祖母の似顔絵や写真はまだ残っていた。そして一番記憶に残っているあの庭がある。昔と少し変わったところもあるけれど、鉢の位置や木の種類は変わらない。水やりをした花だんも残っている。

　現在その家にはもう一人の祖母が住んでいて、庭の花の手入れをしてくれている。手入れはしていても、以前からある花は枯れていってしまうこともある。少し寂しいけれど大切な思い出は消えない。

　中学生になると、中学校から祖母の家が近いこともあって、少しずつ行くことが増えた。その度に私の大好きな庭を見ることができる。桜やあじさい、大好きなひまわりの咲いている庭が、行くごとに少しずつ変わっている。楽しみが毎回増えていく祖母の家は私の宝物の一つになった。たくさんの思い出がつまっている祖母の家をずっと大切にしていきたい。そして、家に遊びに行くのを楽しみに待ってくれている祖母を大切にして過ごしていきたいと思う。曾祖母とのかけがえのない日々をつないできた庭の世話も欠かさずに残していきたい。

　ずっと私と会うことを楽しみにしてくれて、毎回お皿いっぱいのお菓子を用意してくれた優しい曾祖母にはとても感謝している。こんなに誰かに愛され続けて、誰かの心の中に残り続けられるような人に私も将来なりたいと思う。

　ひいおばあちゃん、ありがとう。これからも頑張るよ。